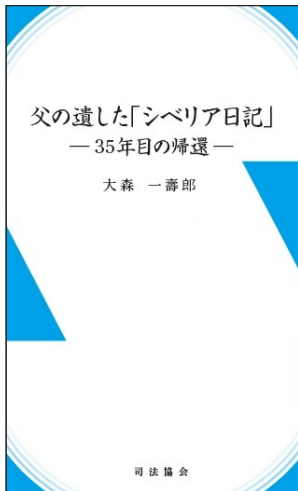


父の遺した「シベリア日記」 - 35年目の帰還 -



著者	:	大森 一壽郎
定価	:	本体 900 円 + 税
判型	:	新書判
ページ数	:	186 ページ
ISBN	:	978-4-906929-68-9
発行	:	平成 30 年 1 月

著者 大森一壽郎 プロフィール

昭和23年(1948年)神奈川県横須賀市生まれ
 昭和46年 横浜地方裁判所裁判所事務官採用後,最高裁判所をはじめ各地を裁判所書記官,裁判所事務官として歴任,最高裁判所訟廷首席書記官を経て,
 平成17年 東京簡易裁判所判事
 平成27年 現横須賀簡易裁判所判事
 趣味は,紙漉(す)き,特に竹紙を中心に研究を重ねている。

内容

終戦から35年を経て書きしるされたこの日記を,最高裁判所営繕課の主任技官であった父から託されて,世に出す決意を固めた筆者は,生前の父からもっと話を聴いておくべきであったという後悔とともに,父の生立ちから戦後までの時代的背景を掘り下げてみて初めて日記に秘められた実際に抑留生活を強いられた者でしか表しきれない平和への強い祈りを肌で感じとることができた。

今や単なる紙片でしかないロシア政府から交付された労働証明書は,対価で置き換えることのできない苛酷なシベリア抑留の事実の証明である。

父の日記に綴られている内容は,辛く悲しいものばかりではなく,異境の地で味わった青春の片鱗も飄々と表されている。また,戦争は憎んでも,人を憎まずといった人種間を超えた人間味溢れる内容となっていることに筆者は感動を覚えた。

庭を眺めながら孫娘を膝に抱いて,「戦争は何があっても絶対にしてはいけない。」とつぶやく父の後ろ姿が幻のように浮かぶのであった。